



五 小春おばさん

地球を出発した人々は、次々と新地球に到着した。新地球は地球で言えば、秋の季節だった。列車の中でちじこまった体が思わず背伸びをするような、気持ちのいい気候だった。そう、ポカポカした春のような天気、小春日和だ。これまで、灼熱の夏と氷の冬しか味わってこなかった人々は、先祖伝来の地球を離れて残念な思いがあったものの、こうした天気に触れて、新地球に移住してよかったと、心から喜んだ。これも、こうした心地よい季節のおかげだと感謝して、人々は「小春おばさん」と呼んで讃えることにした。

偶像崇拜の象徴として、小春おばさんの金像を始め、銀像、銅像、アルミニウム像などが作られた。まだ、貴金属類が調達できない地区では、木を始め、ペットボトル、段ボール、折り紙、泥だんごなどでも作られた。こうして、小春おばさんの姿は、市役所を始め、学校、病院、公園、スーパー、家の神棚や仏壇など、街中の至る所に飾られた。

しかし、人々の小春おばさんへの人気は一時的なものだった。秋が深まるにつれて、これまでの地球ほどの極寒ではないけれど、少しは寒い方が、心や体が引き締まっていい、麦踏みの麦を見ろ、寒さと試練を乗り越えた先に豊かさがあるんだ、と冬を期待する気運が高まっていった。

その気運と共に、小春おばさんの人気は下火となり、代わりに、雪をモチーフにしたゆるキャラの「小冬ちゃん」の人气が上昇していった。小春おばさんの金像などは取り壊され、その材料を使用して、新たに小冬ちゃん像が設置された。

ただし、季節は、冬が極まってくると、冬が嫌になった、冬に飽きた人々が春を待ちどおしくなってきた。それに伴い、小冬ちゃんの像は取り壊され、再び、その材料を使用して、新たな、ゆるキャラの「麦秋ちゃん」の像に変更された。

その後、再び、人々の、温かさよりも暑さを求める気持ちと共に、季節も移り変わり、像も「小夏ちゃん」に変更された。

しかしながら、あれほど夏を欲した人々は、いざ夏に面すると暑さが嫌になり、「小さな秋を見つけよう運動」を展開するようになった。そして、再び、「小春おばさん」の像がが静かな人気を博し始めた。やはり、四季はいいものだ、と人々は心変わりを讃えた。

人々の移り気はアート作品だけではなかった。音楽業界においても、実りの秋を歌った「アンジェロ・アキさん」から冬の厳かさを歌った「アンジェロ・フユさん」、生き物の芽吹き喜びを歌った「アンジェロ・ハルさん」、自由な開放感を歌った「アンジェロ・ナツさん」へと、四

季折々に、音楽の売り上げのチャートが変動した。

移り気は、アートや音楽など、嗜好品ではなかった。人々の日々の暮らしにも大きな影響を与えた。地球でアンジェロ四季として喫茶店を営業していた老夫婦も、新地球に移転した際に、新たに「アンジェロ・新四季」という名前に店の名を変えた。

もちろん、二人とも高齢なため、新たな投資はできずに、店舗の装いは、地球から持参した古いコーヒーカップや椅子、テーブルなどの調度品で占められ、新四季という名前より、古四季といった名前が似合う雰囲気だったが、そのギャップの差が返って人気を博した。

年齢の差が親子ほど違うと言われている、マスターとママの夫婦であったが、見た目においては、ほぼ変わらないように思えた。若いころの十歳差も、年齢を重ねれば、一歳程度しか変わらなくなるものなのだ。それは、よく考えれば当然のことであった。

二十歳の十歳は、二分の一に相当するが、百歳のうち十歳はわずか、十分の一にしか相当しない。五十パーセントと、十パーセント。どう考えても、五十パーセントの方が、比率が高い。小学生でも分かる問題だ。だが、年齢を重ねると、頭の回転も重くなり、その差がどの程度のものなのかわからなくなる。そんなことはもうどうでもいいのかもしれない。

とにかく、地球では、マスターとママがまだ若い頃に始めた喫茶四季だったが、新地球に移転する頃には、マスターやママだけでなく、当然、新四季に集まってくるお客さんたちも、五十歳後半のプレ高齢者が少なくなり、六十歳後半の前期高齢者や七十歳後半の後期高齢者たちが多く占めるようになっていった。

人々が地球から新地球へ移動し、新地球の季節が秋から冬、春、夏、再び秋へと移り、それと共に、アート作品や音楽の人気も変動し、人々の根幹である日常生活も、喫茶店のマスターやママとお客さんたちのように移ろっていった。そして、人類は、いつ、新新地球へと移ろって行くのだろう。